

絵本を用いた運動遊びの実践研究 —保育内容「健康」・「言葉」に関する教材開発を視点として—

A Study on Teaching Strategies of Infant Exercise Play Using Picture Books : Considering the Issue from Development of Teaching Materials for Childcare Content “Health” and “Language”

矢幅 照幸* 石井 由依** 若槻 稜磨***
近藤 雄大*** 崎田 嘉寛***

Teruyuki Yahaba, Yui Ishii, Ryoma Wakatsuki
Yuta Kondo and Yoshihiro Sakita

概要

本研究は、運動の要素を含む絵本を活用して、幼児のための運動遊びに関する指導方法を提案することを目的とした実践研究である。なお本研究は、『幼稚園教育要領』で示された「健康」と「言葉」のねらいと内容に基づいている。具体的な研究手続きは、デザイン研究 (Design-based Research) の考え方を援用して、絵本を用いた運動遊び実践の質を漸進的に高めることであった。結果として、絵本の選定、総運動時間、実践の展開方式、運動内容における要素、有効な指導方法 (肯定的フィードバックと発問) といった絵本を用いた運動遊びに関する研究知見を提案した。本研究の成果は、幼児の運動能力向上および運動指導の専門家ではない保育者の運動指導力向上に寄与すると考えられる。

1. はじめに

近年、子どもの体力低下が指摘されるなか、文部科学省⁽¹⁾は『幼児期運動指針』を発表し、「幼児期における運動の実践は、心身の発育に極めて重要であるにも関わらず、全ての幼児が十分に体を動かす機会に恵まれているとはいえない現状」があり、「幼児が多様な運動を経験できるような機会を保障していく必要がある」と述べた。具体的には(1)多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること、(2)楽しく体を動かす時間を確保すること、(3)発達特性に応じた遊びを提供すること、の3点を求めており、保育者は「運動遊び」等を通して幼児の運動能力を向上させるための保育を構想する必要がある。

これまでの研究動向に目を向けると、畑野ら⁽²⁾や畑野⁽³⁾が明らかにしているように、保育内容「健康」や子どもの運動遊びに関しては、多くの研究が蓄積されている。たとえば、森ら⁽⁴⁾は、保育者の幼児期における運動遊びの体験が体育指導に影響することを、日比⁽⁵⁾は、保育者志望学生のスポーツ歴の有無が運動指導への自信感に影響を及ぼすことを明

らかにしている。保育者が運動指導への自信を高めるには、養成課程において多くの運動経験を得ることが重要であることは言うまでもないが、加えて、運動指導が得意ではない保育者にも実践できる指導方法を確立する必要があると考えられる。

しかしながら、幼児の運動能力向上や運動指導の専門家ではない保育者が指導する方法は、管見の限り十分に蓄積されていない。

そのため、本研究では、『幼稚園教育要領』で示された「健康」と「言葉」のねらいと内容に基づく、運動遊びと絵本の読み聞かせを組み合わせた幼児体育を構想した。これにより、運動指導の専門家ではないが絵本の読み聞かせを得意とする保育者の、運動指導能力の向上に寄与することを企図した。具体的には、保育者が内容に「運動遊び」の要素を多く含む絵本を読み聞かせ、幼児自らが絵本に描かれている動作を想像して身体を動かすことで、運動スキルを向上させ、身体活動量を高めることを、デザイン研究の考え方を援用して試みた。

2. 研究方法

* 北海道科学大学事務局
* * 帯広大谷短期大学
* * * 北海道大学大学院

2.1 対象と実践回数

就学前の幼児を対象に、絵本を用いた運動遊び実践を行なった。各運動遊び実践の時間、および参加した幼児の年齢構成と幼稚園・保育園等への所属状況を表1に示す。表1の補足事項として、3回の実践すべてに参加した幼児は1名（女児：4歳）であり、計2回の実践に参加した幼児は5名（女児3名：5, 4, 3歳、男児2名：5, 4歳）であった。運動遊び実践の指導者は、高等学校保健体育科教職経験年数21年の男性指導者が担当したが、幼児への運動遊び指導は今回が初めてであった。

表1 実践対象

	第1回目実践	第2回目実践	第3回目実践
実施日	2021/1/23	2021/2/6	2021/2/13
実践時間	33分12秒	25分10秒	31分30秒
	女児 / 男児	女児, 男児	女児, 男児
合計 (名)	4 / 6 (3) / (3)	4 / 0 (3) / (0)	5 / 7 (3) / (4)
5歳児	1 / 4 (1) / (3)	1 / 0 (1) / (0)	2 / 4 (1) / (3)
4歳児	1 / 2 (0) / (0)	2 / 0 (1) / (0)	1 / 2 (0) / (0)
3歳児	2 / 0 (2) / (0)	1 / 0 (1) / (0)	2 / 1 (2) / (1)

括弧内の数値は、幼稚園在籍者の人数を示す

なお、運動遊び実践の開始前に実践の趣旨と方法を口頭で保護者に説明し、同意を得た上で運動遊びを実践した。また、運動遊び実践に際しては、事前に指導案を作成の上、実践補助者を2～3名配置することで安全面を十分に配慮して行なった。

2.2 絵本の選定と運動遊びの要素抽出

絵本の選定にあたっては、まず、中川素子『スポーツするえほん』（岩波書店、2019）を参照した。同書ではテーマ別に60冊のスポーツに関連する絵本を紹介するとともに、紹介しきれなかったスポーツに関連する絵本を一覧として88冊提示している。同書での紹介内容に基づいて、実際に絵本をいくつか通覧し、絵本を選定する観点を次の2点に定めた。
1) 読み聞かせ時間が総時間の3割以下になること、
2) 運動遊びの内容あるいは運動要素として3～5件を抽出できる内容であること。

最終的に、中川素子『スポーツするえほん』（岩波書店、2019）で紹介された絵本からは選定せずに、上記の観点に基づいて、中川李枝子（作）・大村百合子（絵）『たからさがし』（福音館書店、1994）を選

定した。選定した絵本の概要を示すと以下のようになる。

ある日、少年「ゆうじ」と兎の「ギック」が杖を見つけるが、同時に杖を手にとったため、引っ張り合いの取り合いっこになる。どちらが先に見つけたのかを決めるために、かけっこ、すもう、幅跳びで勝負したが結局決まらない。ギックのおばあちゃんに、どうすればいいかをたずねたら、たからさがしを提案される。二人は、杖を再び探しに行き、またも同時に手に取ってしまう。しゅしゅ二人で一緒におばあちゃんのところに持って帰ってきたところ、おばあちゃんは、欲しがっていた杖を二人が見つけてくれたことをとても喜んだ。おばあちゃんはさっそく杖を使って歩き、二人は手をつないでおばあちゃんのあとを歩いた。最後に、おばあちゃんは二人にご褒美としておやつを準備する。

同書は、総ページ数が27ページ（総文字数2,070文字、挿絵数27：表紙含む）であり、およそ7分前後で読み聞かせることが可能である。すなわち、30分程度の運動遊び実践であれば3割以下に収めることができる。また、引っ張り合い、かけっこ、すもう、幅跳び、たからさがし、という5つの運動内容が内容に組み込まれており、運動要素として示せば、引く、走る、押す、跳ぶという4要素を抽出することができる。運動遊びとして構成する際には、4つの運動要素のいずれかを含み、絵本のストーリーに沿って二人組ないしは全体で取り組む内容とした。

2.3 実践の調査内容

実践のデータとして、すべての実践をビデオカメラ4台で撮影した。このうちの1台は指導者の首からぶら下げて撮影（図1：ビデオカメラ①）することで指導者と指導者に話しかける幼児の発話をすべて記録した。これらの発話記録は、すべてテキスト化している。残りの3台（図1：ビデオカメラ②～④）は固定して撮影することで、指導者および幼児の動きを死角なく記録した。

撮影した映像記録は、ビデオ編集ソフトを使用して、ビデオカメラ①～④の4つの記録を1画面で視聴できる映像として編集し、テキスト化した指導者および指導者に話しかける幼児の発話を字幕として挿入した。この編集映像に基づいて、体育授業分析アプリ「Lesson Study Analyst for Physical Education」で分析を行なった。同アプリでは、期間記録と相互作用行動記録を分析することができる。

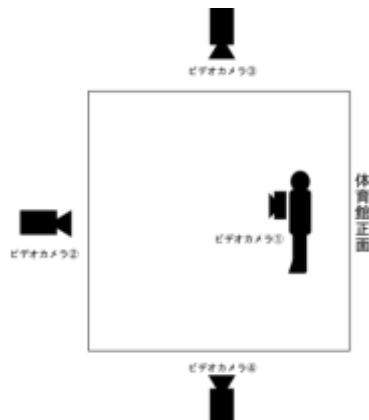


図1 ビデオカメラの配置

期間記録については、同アプリでは学習指導場面、マネジメント場面、認知学習場面、運動学習場面と設定されているが、本研究では、指導（指導者による説明）、マネジメント（準備、移動、片付け）、絵本（読み聞かせ）、運動遊び、の4つに読み替えて頻度と割合を分析した。相互作用行動記録については、同アプリのデフォルトに従い、肯定的FB（対象：全体・グループ・個人、内容：一般的、具体的）、矯正FB（対象：全体・グループ・個人、内容：一般的、具体的）、否定的FB（対象：全体・グループ・個人、内容：一般的、具体的）、発問（対象：全体・グループ・個人）、励まし（対象：全体・グループ・個人）の頻度と割合を分析した。

3. 実践内容の概観

絵本を用いた運動遊び実践を改善しながら計3回実施した。どのように改善を図ったのかの概要を示したものが図2である。

第1回目の実践は、「導入運動→運動遊びA'→絵本（読み聞かせ）→運動遊びA」として実践を進行した。運動遊びA'と運動遊びAは同じ内容である。すなわち、絵本に登場する運動を事前に体験することで、その後の絵本の内容理解が深まり、さらに同じ運動遊びをすることでより活発に運動が実施されるのではないかという仮説に基づいて実践をデザインした。しかし、実際には実践の内容が多岐にわたり、指導者が指導計画を消化することに精一杯の状況となってしまった。

そこで、第2回目の実践は、第1回目の実践の反省、および実践分析の結果を踏まえて実践をデザインした。第2回目の実践は、指導計画を単純にすること、および①運動遊びの強度と安全性の両立、②幼児へのフィードバックの改善という観点に基づ

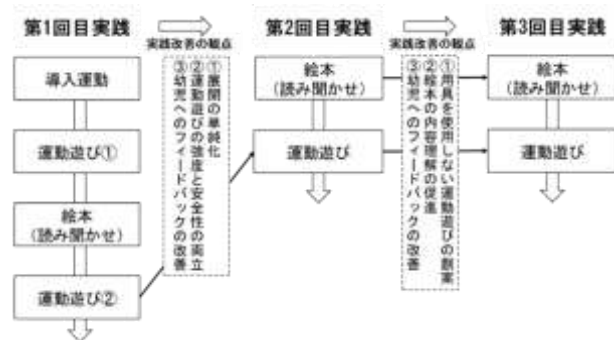


図2 実践内容の改善図

いて実践をデザインした。特に絵本のストーリーに基づいた運動遊び内容とするため、いくつかの運動遊びでは大型マットやトランポリンなどの大型用具を使用した。確かに、用具を使用した運動遊びは幼児の関心度は高いが、汎用性が低くなる。

そのため、第3回目の実践では、第2回目の実践の反省、および実践分析の結果を踏まえて実践をデザインした。第3回目の実践デザインは、①用具を可能な限り使用しない運動遊びとすること、②絵本の内容をより理解させるように読み聞かせること、③幼児への具体的なフィードバックを増やすこと、の3点に基づいて行なった。特に①に関しては、運動指導の専門家ではない保育者への汎用可能性、②に関しては、運動遊びが絵本の内容理解に影響を与える可能性、という仮説に基づいて設定した。

4. 第1回目の実践

4.1 第1回目の実践概要

第1回目の実践の参加幼児は10名であり、実践時間は33分12秒であった。実践は、導入運動（準備運動）→運動遊びA'→絵本（読み聞かせ）→運動遊びAの順で展開した。実践のタイムラインを図3に示す。期間記録は、指導（8分6秒：24.4%）、マネジメント（4分10秒：12.5%）、絵本（7分38秒：23.0%）、運動遊び（13分19秒：40.1%）であった。

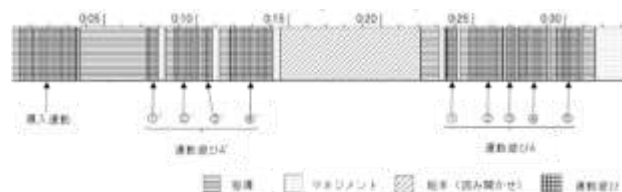


図3 第1回目実践タイムライン

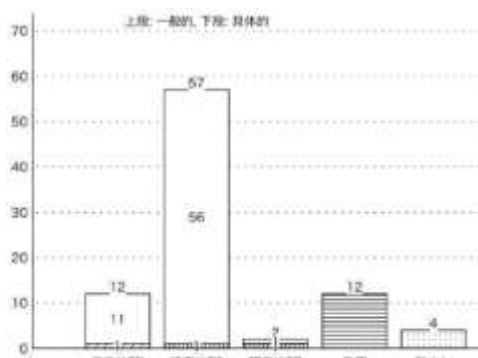
運動遊びの具体的内容は、絵本の内容に基づいて、

次の通り実施した。①2人組で棒をやさしく引っ張り合う、②2人組でかけっこをする、③2人組で押し合う、④2人組で幅跳びをする、⑤2人で棒を一緒に持って体育館を1周する。絵本を読み聞かせる前に①～④（図3：運動遊びA'）を実施し、絵本を読み聞かせた後に①～⑤（図3：運動遊びA）を実施した。

絵本の活用方法は、運動遊びA'（図3）を実施していたため、絵本を読み聞かせる際に「さっき棒を引っ張るような遊びしたよね」などを適宜挿入しながら読み聞かせを行なった。また、運動遊びA（図3）の際には、読み聞かせた絵本の挿絵を提示して運動遊びを実施した。

実践時の相互作用行動は、表2に示しているように、肯定的FB（一般11回、具体1回）、修正的FB（一般56回、具体1回）、否定的FB（一般1回、具体1回）、発問12回、励まし4回であった。

表2 第1回目実践相互作用行動



4.2 実践の省察

第1回目の実践後、実践の編集映像および期間記録と相互作用行動記録分析の結果に基づいて、指導者および共同研究者で省察を行なった。

まず、実践の展開について「運動遊びA' → 絵本（読み聞かせ）→ 運動遊びA」の展開について振り返った。指導者の立場からは、指導計画を消化することに精一杯の状況となってしまったことが指摘された。一方で、「動→静→動」の実践展開は、同年齢の幼児集団には適用可能かもしれないが、発達段階に顕著に差が出る異年齢の幼児集団に対しては、可能な限りシンプルな展開が適しているのではないかと推察された。展開を複雑にすることは、指導場面や運動場面での修正的FBを増加させる一因となったと考えられる。

次に、運動遊びの内容については、絵本の内容（ゆ

うじとギックの競争）に可能な限り忠実に構成したため、基本的に2人組での運動としていた。しかしながら、運動量や運動強度を考慮すれば、必ずしも絵本に忠実に2人組での運動に拘泥する必要はなかったことが示唆された。一方で、運動量や運動強度を増加させるためには、安全性に特段の配慮が必要となる。たとえば、①2人組で棒をやさしく引っ張り合う（図4）と③2人組で押し合うについては、意図せず力を入れすぎたり抜きすぎることによって怪我につながる可能性がある。ただし、絵本の挿絵をお手本とすることでお互いに加減し合うことができた可能性も否定できない。

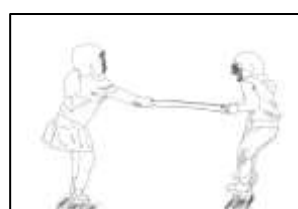


図4 引っ張り合う

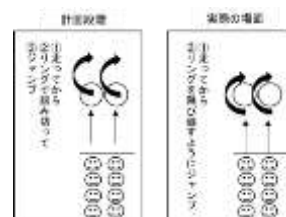


図5 幅跳び

最後に、実践時の相互作用行動については、修正的FBの多さおよび肯定的FBと発問の少なさが問題点として挙げられた。前者については、前述のように展開の複雑さに加えて、④の2人組で幅跳びが指導者の意図した運動とならなかったためである。図5のように、計画段階では床面に設置したリングの中から踏み切る予定であったが、実際にはリングを跳び越す運動となってしまったため、修正的FBが増加したと判断される。

次回実践までに、展開の単純化、強度と安全性を両立させた運動遊びの創案、幼児へのフィードバックの積極的な改善を図ることとした。

5. 第2回目の実践

5.1 実践の概要

第2回目の実践の参加幼児は4名であり、実践時間は25分10秒であった。実践は、絵本（読み聞かせ）→運動遊びの順で展開した。実践のタイムラインを図6に示す。期間記録は、指導（7分58秒：31.7%）、マネジメント（3分37秒：14.3%）、絵本（6分37秒26.3%）、運動遊び（6分59秒：27.7%）であった。

運動遊びの具体的内容は、第1回目の実践の省察に基づいて、次の通り実施した。①指導者の腕を引っ張り合う、②全員でかけっこをする、③マットを

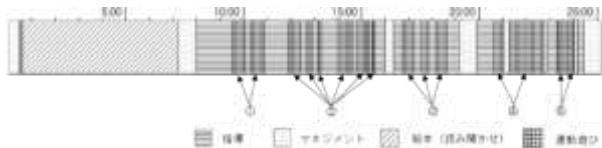


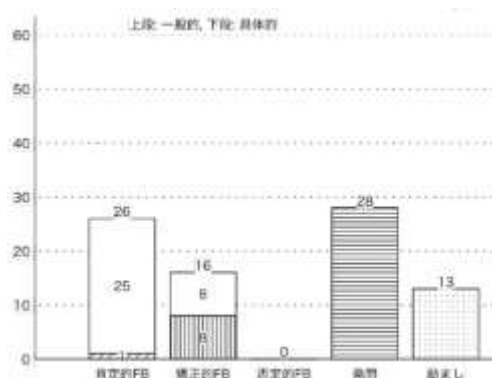
図6 第2回目実践タイムライン

押す，④トランポリンを使用してマットに幅跳びをする，⑤2人で手をつないで体育館を1周する。

絵本の活用方法は，運動遊びの前に読み聞かせを行なった。また，運動遊びの際には，読み聞かせた絵本の挿絵を拡大したパネルを提示して運動遊びを実施した。

実践時の相互作用行動は，表3に示しているように，肯定的FB（一般5回，具体的1回），矯正のFB（一般8回，具体8回），否定的FB（一般0回，具体0回），発問28回，励まし13回であった。

表3 第2回目実践相互作用行動



5.2 実践の省察

第2回目の実践後，実践の編集映像および期間記録と相互作用行動記録分析の結果に基づいて，指導者および共同研究者で省察を行なった。

まず，実践の展開について「絵本（読み聞かせ）→運動遊び」の展開について振り返った。特に，指導者にとって単純な展開は実践を進行する上で有用であった。一方で，運動遊びの際には，読み聞かせた絵本の挿絵を拡大したパネルを提示したことは，挿絵のように動くことを幼児に求め，幼児たちの動きを制限した可能性もある。幼児の段階では，正しい動きも必要であるが，運動を自由にのびのびと実施することも必要であろう。

次に，運動遊びの内容について振り返った。運動量を増加させるために②かけっこを全員一斉に行なった。また，単に走るだけではなく，ギック（兎）

のように走る，ゆうじ（人間）のように走るなど多彩な展開があった。ただし，全員が同じ距離を走ったため，結果として勝敗がつく形となってしまった。絵本の内容では，一生懸命やったが勝負がつかないこと（引き分け）が背景として提示されているため改善の余地があることが指摘された。一方で，安全を確保しつつ運動強度を増加させるために，①では指導者の腕を引っ張り合う際に，指導者もまた幼児の手をしっかりと握ることを心掛け（図7），③についても幼児同士で押し合うのではなく，マットを押すこととした（図8）。一定程度の改善が図られたと評価することができよう。④については，トランポリンを使用することで踏切位置が明確になり，大きなマットに飛び込む楽しさもあり，幼児には好評であった。ただし，用具を使用しなくてもできるやり方を創案することが課題として提示された。

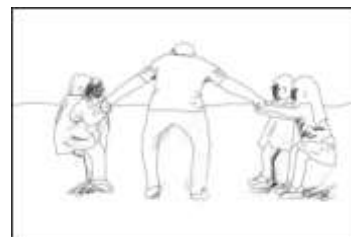


図7 腕を引っ張り合う



図8 マットを押す

最後に，実践時の相互作用行動については，第1回目と比較しても肯定的FBと発問が増加し，矯正のFBが減少していることが確認された。展開を単純にしたことと指導者が2回目の実践で余裕ができたためと判断される。しかし，幼児個人への具体的FBがさらに必要であることが指摘された。

次回実践までに，運動指導の専門家ではない保育者への応用可能性を視野に入れて用具を可能な限り使用しない運動遊びを創案すること，挿絵を拡大したパネルを提示しないかわりに，絵本を読み聞かせる段階でより理解を促すこと，幼児への具体的FBを増やすこととした。

6. 第3回目の実践

6.1 実践の概要

第3回目の実践の参加幼児は12名であり，実践時間は31分30秒であった。実践は，絵本（読み聞かせ）→運動遊びの順で展開した。実践のタイムラインを図9に示す。期間記録は，指導（4分24秒：14.0%），マネジメント（5分51秒：18.6%），絵本（7分45秒24.6%），運動遊び（13分30秒：42.9%）

であった。

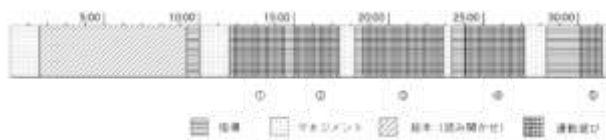


図9 第3回目実践タイムライン

運動遊びの具体的内容は、第2回目の実践の省察に基づいて、次の通り実施した。①指導者の腕を引っ張って進む、②指導者を押して進む、③全員でかけっこをする、④幅跳び（走りながらジャンプして指導者の手にタッチする）、⑤指導者につけられた紐を全員でとる（しっぽとり）。

絵本の活用方法は、第2回目の実践と同様に、運動遊びの前に読み聞かせを行なった。ここでは、読み聞かせの際に、内容に即した発問を適宜行なうことで絵本の内容理解を促した。そのため、運動遊びの際には、絵本の挿絵等を幼児に提示しなかった。

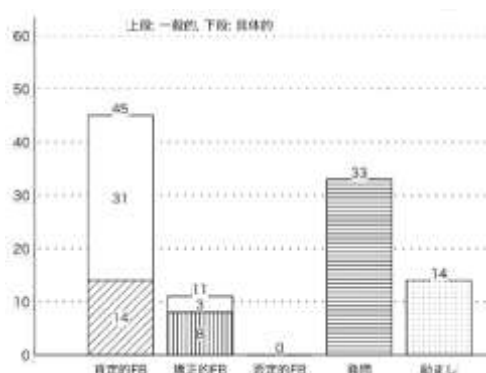
実践時の相互作用行動は、表4に示しているように、肯定的FB（一般31回、具体14回）、修正的FB（一般3回、具体8回）、否定的FB（一般0回、具体0回）、発問33回、励まし14回であった。

6.2 実践の省察

第3回目の実践後、実践の編集映像および期間記録と相互作用行動記録分析の結果に基づいて、指導者および共同研究者で省察を行なった。

まず、実践の展開は、前回と同様に「絵本（読み聞かせ）→運動遊び」とした。参加者数が増えたが、問題となるような事象は発生しなかったと総括した。

表4 第3回目実践相互作用行動



次に、運動遊びについては、前回の省察を踏まえて、可能な限り用具を使用しない運動遊びとした。①（図10）と②（図11）では指導者の腕を幼児一人

で引く・押すことで、安全性を確保しつつ、前回よりも運動強度を増加させた。③のかけっこについては、前回同様に全員一斉に行なったが、前回のように様々な走り方ではなく、回数を重ねる度に幼児に合わせてスタート位置を変更し、ゴールを同着とするようにした（図12）。ゴールが同着となることは、絵本で勝敗がつかないことを事前に提示されていたため、幼児から不満が上がることはなかった点が評価できる。④の幅跳びは、走って行って指導者の手にタッチする（図13）こととした。第1回目実践の踏み切り位置の問題を克服しつつ、用具を使用することなく実施できるようにした点が評価できる。⑤は第1回目実践が2人で棒を一緒に持って体育館を1周する、第2回目実践が2人で手をつないで体育館を1周するであったが、本実践では「しっぽとり」とした。指導者につけられた紐（しっぽ）を「たからさがし」とした。すでに「しっぽとり」を実施したことがある幼児もいたため、前回以前よりも盛り上がり実践を終了することができた。

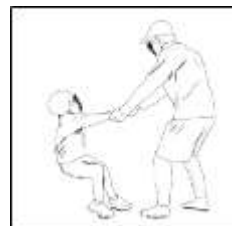


図10 引っ張って進む



図11 押して進む



図12 スタート位置変更

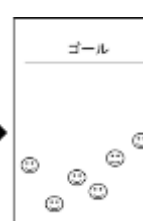


図13 幅跳び

最後に、実践時の相互作用行動については、具体的なフィードバックと、絵本の読み聞かせ時の発問が増加していることが確認された。読み聞かせの際に発問を適宜行なうことは、幼児からの返答があること、運動遊びの際にも同様の発問をすることで指導が円滑なるなどの有用性があったと判断された。

7. 結果と考察

本実践では、絵本を用いた運動遊び実践の質を漸

進的に高めるように実施してきた。各実践の結果は、参加者数および実践時間が異なるため単純な比較はできない。また、参加した幼児に対する調査がなされていない。しかしながら、本実践では、指導者による指導プロセスを可視化し、可視化されたデータに基づいて省察することで実践を改善し、よりよい運動遊び実践を創造することを試みてきた。幼児を対象とする場合、実践前と実践後の変化を測定することは困難であるため、実践全体の因果関係を明確に導出できないが、指導者が指導プロセスを改善すべきと省察・判断し、実際に実践を前進させた記録は、今後の精緻な研究を推進させるために一定程度の価値を有すると考えられる。

本実践の中核となる活動は、運動遊びと絵本の読み聞かせである。この2つの活動は、それぞれで実施しても有用な効果があることは周知のとおりであるが、組み合わせることで相乗効果が期待できる。そのためには、実践全体を通しての有機的な関連を構築する必要がある。表5に示した合計3回の実践の期間記録を見てみると、絵本の読み聞かせ時間を一定時間確保してきたため、運動遊び内容を極力単純化することで運動遊び時間を確保するように実践の改善が試みられていることがわかる。具体的には、第2回目実践の運動遊びの回数は15回であるが、第3回目実践では5回となっている。この第2回目実践では、たとえば、いろいろなかけこの仕方（兎のように走るや人間のように走るなど）を実施したためであるが、第3回目実践ではかけこの距離を幼児ごとに随時変えることでかけこの量を増やしている。多様な走り方を企図することは運動遊びという観点からは重要であるが、その分指導回数もマネジメント回数も増加せざるを得ない。第3回目実践では、使用した絵本の内容を鑑みて、運動（競争）の結果が引き分けであることを重視すべきという判断となっている。この一生懸命走った結果を引き分けにするという内容を構想した判断は、『幼稚園教育要領』における「言葉」の「内容取扱い」で示された「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」と、同要領「健康」の「内容取扱い」で示された「幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達

を促す」および「十分に体を動かす気持ちよさを体験」という2つの領域を架橋するものである。

表5 実践の期間記録の変遷

	第1回目実践	第2回目実践	第3回目実践
指導	8分6秒	7分58秒	4分24秒
	24.4%	31.7%	14.0%
	11回	18回	6回
マネジメント	4分10秒	3分37秒	5分51秒
	12.5%	14.3%	18.6%
	12回	8回	6回
絵本 (読み聞かせ)	7分38秒	6分37秒	7分45秒
	23.0%	26.3%	24.7%
	1回	1回	1回
運動遊び	13分19秒	6分59秒	13分30秒
	40.1%	27.7%	42.9%
	11回	15回	5回
合計	33分12秒	25分10秒	31分30秒
	100%	100%	100%
	35回	42回	18回

一方で、表6に示した合計3回の実践の相互作用行動を見てみると、肯定的FBと発問が増加し、矯正FBが減少していることがわかる。この全体的な傾向は、各実践後に省察を実施した成果と言えよう。特に、多様な発問は、『幼稚園教育要領』における「言葉」の「内容取扱い」で示された「幼児が自分の思いを言葉で伝えるときに、教

表6 実践の相互作用行動の変遷

		第1回目 実践 (回)	第2回目 実践 (回)	第3回目 実践 (回)
肯定的FB	個人	具体的	1	1
		一般的	6	13
	グループ	具体的	0	0
		一般的	1	0
	全体	具体的	0	0
		一般的	4	12
	合計	具体的	1	1
		一般的	11	25
			31	
矯正FB	個人	具体的	1	5
		一般的	27	5
	グループ	具体的	0	0
		一般的	13	1
	全体	具体的	0	3
		一般的	16	2
	合計	具体的	1	8
		一般的	56	8
			3	
否定的FB	個人	具体的	1	0
		一般的	0	0
	グループ	具体的	0	0
		一般的	0	0
	全体	具体的	0	0
		一般的	1	0
	合計	具体的	1	0
		一般的	1	0
			0	
発問	個人	0	0	0
	グループ	0	0	0
	全体	12	28	33
	合計	12	28	33
励まし	個人	1	0	13
	グループ	0	6	0
	全体	3	7	1
	合計	4	13	14

師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること」とも関連するため、絵本の読み聞かせ時における発問と運動遊び時の発問を関連付けることが求められる。また、指導者による具体的な肯定的 FB は、運動遊びに特有な言葉かけをすることで、幼児の言葉の獲得に対して、体と心というフィルターを通した言葉の獲得経験を享受すると考えられる。

8. おわりに

本研究は、運動の要素を含む絵本を活用して、幼児のための運動遊びに関する指導方法を提案することであった。これまで絵本を用いた運動遊び実践が取り組まれていないことを考えれば、本稿の第3回目の実践が、絵本を用いた運動遊びの実践モデルの一つとして定位できよう。以下、提案とともに課題を提示して本稿のまとめとしたい。

①絵本の選定は、運動遊びを主眼とするならば、読み聞かせの時間が実践総時間の 25 (±5) %となるものが一つの目安となると考えられる。この点に関しては、絵本を抜粋して読み聞かせるなど、様々な視点からの検証が求められる。

②運動遊びの時間は、実践総時間の 30 (+10) %が一つの目安となると考えられる。少なくとも、運動遊びを主眼とするならば、絵本の読み聞かせ時間よりは多くとることが妥当であろう。一実践あたりの幼児の運動時間の明確な指標は、管見の限り見当たらない。ここで提案した運動遊び時間も、幼児個人の運動時間ではない。運動遊びの実践を蓄積することで最適な解を得る努力が必要である。

③実践展開は、運動遊びを主眼とするならば「絵本(読み聞かせ)→運動遊び」という展開が適していると考えられる。このことは、反対に絵本の読み聞かせに主眼を置く場合は、「運動遊び→絵本(読み聞かせ)」という展開が想定される。運動遊びが絵本の内容理解に影響を与える可能性については今後の検証課題となろう。

④運動遊びの内容は、絵本の内容、運動量、運動強度を勘案して創案することが必要である。絵本の内容に基づくことで、運動内容の選択が制限されるかもしれないが、絵本の内容や挿絵に感化された幼児の動きを導出することも期待できる。また、運動量や運動強度を増加させるためには、絵本の内容から運動の要素を抽出することで可能となる。運動要

素が絵本の内容と整合性があるかどうかは、指導者の経験や体育・スポーツ観に依拠するため、幼児教育者の養成段階からの継続的な教育が必要である。

⑤絵本を用いた運動遊びの指導時には、肯定的 FB と発問を重視する必要がある。特に、絵本に示された言葉と運動指導特有の言葉や表現(オノマトペ等)を使った具体的 FB が有効である。本実践で使った絵本を例にすれば、「兎さんのように足を上手に使ってピョンと高く跳べたね」と褒めるなどになる。また、発問は、絵本の読み聞かせ時と運動遊び時を関連させて行なうことが有効である。運動指導ということに囚われすぎると、たとえば「足を高く上げた方がいいよ」などとなるが、絵本の内容を踏まえて「うさぎさんはどんなふうに跳んでいたかな」と発問形式に変換することも可能である。補足すれば、運動指導時に絵本の挿絵を提示すべきかどうかを明示的に提案することはできない。少なくとも、絵本の挿絵を提示しなくても、運動指導を円滑にできたという実感がある。

最後に、本実践の指導者は、幼児への運動遊び指導の未経験者であった。今後は、どの絵本でどのような運動遊びを実践できるのかを蓄積することで、運動指導の専門家ではない保育者が、絵本を用いることで運動遊びを展開する一つの契機となると考えられる。

参考文献

- (1) 文部科学省: 幼児期運動指針, 2012.
- (2) 畑野裕子ほか: 保育内容「健康」の研究動向に関する一考察: CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて, 教職課程・実習支援センター研究年報, 3, 159-170, 2018.
- (3) 畑野裕子: 子どもの『運動遊び』に関する研究動向と展望に関する一考察: CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて, 教職課程・実習支援センター研究年報, 1, 151-162, 2020.
- (4) 森博文ほか: 幼児・学童期における遊び体験に関する研究-幼児教育専攻学生に対する調査から-, 九州女子大学紀要. 人文・社会科学編, 39(1), 31-44, 2002.
- (5) 日比健人, 保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について, 夙川学院短期大学研究紀要, 46, 37-48, 2019.